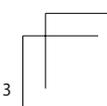
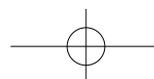
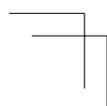


1603-1867
江戸期に学ぶ
繁栄と衰退の法則
お金と経済でみる歴史



日本ビジネス協会(JBC)第6代理事長
松下政経塾塾長代理

神藏 孝之



■ 目次 ■

はじめに	3
徳川家康は「ガッツ」にあふれた人間だった～陣頭指揮	4
トップの人間にいかにガッツが必要か	6
徳川家康はいかに江戸の繁栄の基礎を築いたか	7
他家を圧倒する強大な経済力をいかに築いたか	9
貿易の独占	11
江戸の金融政策～貨幣改鑄について	12
江戸の最盛期はいつか	15
江戸の最盛期前夜～田沼意次の時代	18
田沼時代の「腐敗」をどう考えるべきか？	20
江戸時代の最盛期～徳川家斉の治世	22
開国の「経済的インパクト」～国富の海外流出	24
徳川幕府の「貨幣改鑄」をどう考えるか～金本位制の問題点	28
幕末の激しいインフレの実態とその影響	30
幕府瓦解のその他の要因	31
薩摩藩はなぜ幕末に「強大な力」を持てたのか～その経済的背景	32
長州藩は関ヶ原の合戦後の大減封からいかに復活したか	36
外国人商人との連携～大きな器と広い視野	38
結論	41

はじめに

変化が激しく、先行きの見えない現代においては、「歴史」を学び、その類比から現状の問題点を浮かび上がらせることも、とても重要な方法論です。

さらに、外国人と仕事をする際、または海外で仕事をする場合、自国の歴史や文化についてある程度、語るができないと、とたんに軽く見られてしまう場合もよくあります。そういった意味でも、日本の歴史や思想、文化を学ぶ意義があります。

とりわけ企業の経営者、あるいは国や社会をリードする仕事に就いている方々にとっては、「歴史の検証」は不可欠ともいえるでしょう。

なんといっても、どうすればうまくいくか、あるいは失敗するかについて、実際に会社や国で「実験してみる」ことはできません。実験が失敗したら、それこそ万事休すです。しかし、歴史上には、いくつもの成功事例、失敗事例が積み重ねられています。それらをきよしんたんかい虚心坦懐に見ていくことで、日々の意思決定や判断の場面においても、大きなヒントを得ることができます。

たとえば、組織の栄枯盛衰はどうでしょうか。一代で会社や事業を隆々と発展させる経営者は数多くいらっしゃいますが、もう一方で、盤石に見えた事業が、あっという間に傾いていってしまう事例も山ほどあります。

組織の栄枯盛衰について考える場合、徳川家康と江戸幕府の事例は、検討材料としては、とても貴重なものといえます。徳川幕府のように260年ものあいだ、平和と安定を続けてみせた政権は、世界的にも稀まれです。なぜ、それが可能だったのか。

実は、徳川家康が開いた徳川幕府は、その草創期からすでに、他

の大家（外様大名）を圧倒する強大な経済的基盤を築きあげていました。さらに、その圧倒的な力を背景に、参勤交代などで、他家の経済力を使わせる政策も行ないました。

本来であれば、他藩が幕府を倒すことなど考えられないような状況でした。

にもかかわらず、なぜ明治維新で倒れてしまったのか。

もちろん、「ペリー来航をはじめ、西洋列強諸国が開国を求めたから」という考えが、最初に頭に浮かびます。しかし、よくよく見ていくと、それは1つのきっかけであり、それ以外にも内部的な要因がいくつもあったのです。

この小冊子では、そのことについて深掘りしていきます。とりわけ「経済的な要因」を中心に、テンミニッツTVの講義をご紹介します。見ていきたいと思えます。

徳川家康は「ガッツ」にあふれた人間だった～陣頭指揮

最初に、いかに徳川家康が「盤石の体制」をつくりあげたかを見ていきましょう。

忘れてはいけないのが、徳川家康自身がまことに「ガッツ」にあふれた人間だったことです。徳川家康は多彩なブレイクの登用など、人材活用にも見事な手腕を発揮していますが、とりわけ武将としての力量が問われる合戦の場では、常に「陣頭指揮」をとっていました。

関ヶ原の戦いでは58歳、大阪夏の陣では73歳でしたが、その年齢であっても、陣頭指揮を貫いています。家康の最後の合戦となった大坂夏の陣でも、真田信繁（幸村）に、本陣近くまで攻め込まれ危機に陥ったといわれますが、それほど前線に身を置いていたという

ことです。

なぜ家康は陣頭指揮を貫いたのか。このことについて、片山杜秀^{もりひで}先生の解説を見ましょう。

《とにかく家康という人は年をとっても、率先指導、陣頭指揮です。関ヶ原でも、すでにずいぶん年であったけれども、自分で全軍を率いていました。

大坂冬の陣・夏の陣においても同じです。家康本人は必ずしも大坂に行かなくてはいけないわけではない。秀忠をはじめ、後継者である徳川一族は十分いるわけです。戦闘能力、指揮能力に優れた優秀な譜代の家臣にも、松平一族のなかにも有力な人たちはいるわけです。

しかし、本人が行き、その場で「家康がいるから勝つ」としないことには、カリスマ性はつかないのです。トップが常に陣頭指揮をとり、その場で戦争をやって、勝ったときは「やはり家康が出張っていたからだ」というストーリーにしなくてはならない》

（片山杜秀 徳川家康の果敢と深謀～指導者論と組織論

（1）率先し陣頭指揮する）

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4726]



片山杜秀先生はこのことを、鎌倉幕府を成立させた源頼朝との対比で浮かび上がらせます。頼朝は、途中からは陣頭指揮をせず、戦場の中心にいたのは、弟の源義経でした。片山先生は「ヒロイックなカリスマ性は弟がかなり持ってってしまうというかたちで、鎌倉幕府の誕生の物語はできてしまう」と指摘します。その結果、頼朝がカリスマ性を十分に持つことができず、鎌倉幕府のその後も影響を与えてしまったというのです。勉強家でもあった家康は、このような歴史的背景を知っていたからこそ、陣頭指揮を貫いたので

しょう。

この話は、トップが陣頭指揮を貫くことの重要性を、今の時代のわれわれにも教えてくれます。

トップの人間にいかにかがツが必要か

トップの人間にいかにかがツが必要かについて、渡部昇一先生がテンミニッツTVで、明治時代の外交交渉を例にしつつ、教えてください。人間通の渡部昇一先生ならではのご指摘です。

《私はときどき思うのだが、外交上の条約やビジネスの契約を結ぶ際、交渉担当として、ヤクザのようなという語弊があるが、それほどがツがある人間を雇うべきではないか。条約にせよ契約にせよ、交渉事にはがツが非常に重要になる。がツがあれば、勝つために良いことはもちろん、悪いこともできる。清濁併せ呑む度量がある。だが、がツがない人は良いことだけをやろうとする。清濁の「濁」を自分の腹ひとつで呑み込む勇気がない。それでは、国運や社運を賭けた真剣勝負には勝てないのである。

逆にいえば、トップの人物にいかにかがツが必要か、ということである。がツはあっても頭があまりよくないトップなら、頭の良い参謀役がつけばいい。がツはあるが人情がないトップなら、人情味あふれる補佐役がつけばカバーできる。ところががツがないリーダーだけは、誰も補佐することができない。

振り返ってみると、明治の人たちが国政や外交で下した判断のなかで、良かったものと考えてみると、結局、意思決定者であるリーダーたちにがツがあったからだと思えるケースが少なくないのである》

(渡部昇一 本当のことがわかる昭和史《6》人種差別を打破せんと日

本人は奮い立った(6) ハリマン提案を蹴った「深みのなさ」)

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=983]



がツがないリーダーだけは、誰も補佐することができない。まさに至言でしょう。リーダーと補佐役のそれぞれに、いちばん大切なことは何かについて、透徹した見方で核心をえぐっているように思えてなりません。織田信長との関係にしても、豊臣秀吉との関係にしても、さらに豊臣家滅亡に至る過程にしても、徳川家康は、ときに「狸親父」と称されるような姿さえあえて貫いています。それも、家康に「がツ」あればこそでしょう。

さらにいえば、徳川家康が多くの人材を活用し、各々の力量を最大限に引き出すことができたのも、まさに家康自身の「がツ」の賜物だと考えると、大いに合点がいきます。

徳川家康はいかにか江戸の繁栄の基礎を築いたか

次に挙げるべきは、徳川家康が平和な時代をつくりあげ、繁栄の基を築いたことでしょう。江戸時代に日本は大きく進歩しました。急激な人口増、積極的な新田開発、現代にも通じる部分がある巧みな金融政策、幕府や各藩が推進した産業政策——。これらによって江戸期を通じて（もちろん、山や谷はあるものの）経済は発達し、成長します。この時代の資本の蓄積が、後の明治維新を起点とした近代国家の確立という大偉業の土台になったのはいうまでもありません。

また、そのような経済基盤も背景に、この時代は日本ならではの文化・芸術などの分野も著しく発展しました。とりわけ、庶民たち

による文化が大いに伸長したことは、江戸時代の大きな特長でしょう。

実際に、江戸時代以前は、一地方の町にすぎなかった江戸は、家康が幕府の本拠として以降、急速に発展を遂げることになります。大都市・江戸は人口100万人を擁するまでに成長します。その基盤となった家康時代の江戸の町づくりの巧みさは、よく指摘されとおりです。

そして日本全国で見ても、江戸幕府が成立した1603年の時点で約1200万人だった人口は、約100年間で3000万人へ増加します。

家康は、国の安定のためには、経済や財政が大事だということを深く理解していたのです。そういった意味では単なる武の人ではありません。

しかも徳川家康は、そのような国づくりを、多彩なブレーンを登用することによって成し遂げました。彼は外国人や商人など、その時々に合わせて多様な人材を抱え、必要に応じて諫言かんげんをしてもらう姿勢を崩しませんでした。

家康が天下泰平を成し遂げようと考えたときに、政治、経済、金融、ビジネス、軍事、国際情勢、宗教、哲学、歴史など、知らないといけないことが世の中には多すぎるほど存在しました。家康は、それらすべてを自分一人だけで網羅することは不可能だと、深く理解していました。そのため、自分の近くに優秀なブレーンとして多種多様な人材を置くことで、情報収集や分析、言動、意思決定の質を高めようとしたのでしょう。

その事例について、小和田哲男先生は、以下のとおり指摘しています。

主なブレーンたち・部下たち

- ・初代茶屋四郎次郎 (1572年頃～)
- ・大久保長安 (1582年頃～)
- ・後藤庄三郎 (1593年頃～)
- ・天海 (1599年頃～)
- ・ウィリアムズ・アダマス (1600年頃～)
- ・ヤン・ヨーステン (1600年頃～)
- ・林羅山 (1605年頃～)
- ・以心崇伝 (1608年頃～)

※ 時期は推定あり

《石見銀山や佐渡金山、出雲金山もありました。そういったところから出てきた金銀が、幕藩体制の財政基盤をつくったということになります。徳川幕藩体制の初期の頃は長久保長安、それからあまり有名ではありませんが、代官頭で伊奈忠次という人がいました。彼らが、各地の河川を補修し、合わせて新田開発をしていきました。それによる収入も、かなり莫大になってきたということがあります》

(小和田哲男 戦国武将の経済学(4) 徳川家康の経済政策)

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3245]



他家を圧倒する強大な経済力を いかに築いたか

さらに、江戸幕府が260年間続いた極めて大きい理由として、家康が、他の大名家を圧倒する強大な経済的基盤を築きあげてきたことが挙げられます。徳川家による長期的な安定政権確立のために、さまざまな仕掛けも施していました。

特に江戸幕府は、直轄地が400万石（親藩の領地を含めると800万石近く）あったことが力の源泉になっていたようです。小和田哲男先生はこのことについて、以下のとおり指摘しています。

《関ヶ原後は、徳川幕府の家康直轄地が約400万石です。完全に徳川家を誰も倒すことができないような力関係になっていきました。外様でいちばん大きな大名が100万石（加賀・前田家）です。ほかには島津や伊達りょうがが60万石ぐらいですから、徳川家がダントツの1位です。他を凌駕していくシステムが完成したということで、

あれだけの長期安定政権ができたのでしょうか。経済的にダントツの1位でいることで長期安定政権をつくったという、家康の先見の明、先を読む力は大きかったと思います》

さらに、家康は各大名の妻子を江戸城下に住ませます。これは豊臣秀吉も行なったことで、人質としての意味もありましたが、3代将軍・徳川家光の時代に定められた「参勤交代」の制度につながっていきます。各大名は妻子を江戸に置き、原則として1年交代で江戸と国元に住むことを義務づけられたのです。大名は「大名行列」を組んで、国と江戸とを往来するわけですが、その行列の規模も各家の規模・格式によって決められており、各藩はその威儀を競いあいました。

これは当然、各藩にとっては大きな出費でしたが、それを幕末に至るまで行なわせたのですから、いかに幕府の権威が高かったかがわかります。

幕府の目的は、当然、各大名に散財させて反抗しづらい体制にすることにあったわけですが、現代風にいえば、これは大きな公共事業としての側面もありました。威儀を正した大名行列が日本全国を行き来するために、街道や宿場も整備されます。しかも定期的に各宿場町にお金が落ちますので、各地は潤い、それによってインフラの維持・発展もなされます。庶民のあいだで「お伊勢参り」などが大いに流行したのも、このようなインフラの賜物でもありました。

参勤交代は、各藩にとっては大変な出費でしたが、日本全国を1つにし、国全体の経済を回して安定的に発展させる要因でもあったのです。徳川幕府は、自らの懐を痛めることなく、各大名に負担をさせてこのような「公共事業」をさせていたことになります。とても知恵のあることだと思えます。

貿易の独占

江戸時代は、家康の後から三代将軍の徳川家光の時代にかけて、「鎖国」が完成したといわれています。たしかに幕府以外の諸藩は、海外との交易や交流を厳しく制限されていました。

しかし、幕府自体は、海外とのつながりを持ち、海外と貿易をしたり、国際情勢の情報を仕入れたりしていました。

そもそも家康は、海外への認識をしっかりと持っていたのです。このことについて、山内昌之先生は以下のとおり指摘しています。

《対馬口、長崎口、琉球口、松前口という外国との窓口を持っていました。海外への認識は豊臣秀吉も持っていました。けれども、秀吉の場合は常に、ある種の侵略とか、攻撃的な要素があった。家康の場合はどちらかというと、きちんとした共存、あるいは協調、そういう要素で海外への関心を持っていくという違いがあるわけです》

(山内昌之 徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編(2)

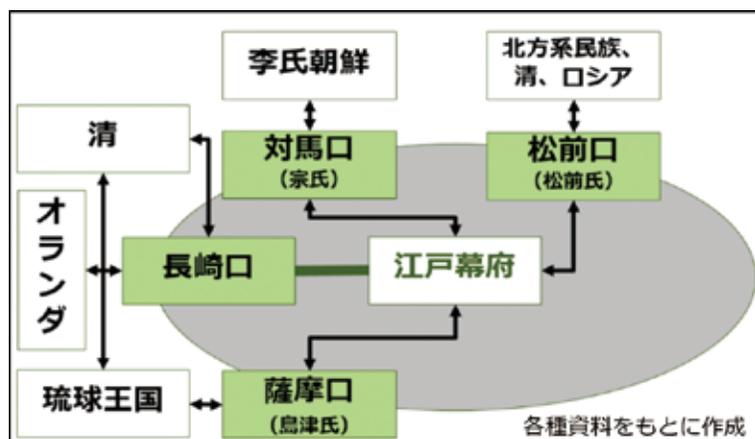
海外への認識と基礎教養)

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3837]



また、海外との交流を幕府が独占していたことについて、小和田哲男先生は、以下のとおり指摘しています。

《よく江戸時代を「鎖国」という言い方をします。たしかに三代将軍・徳川家光の後からは「鎖国」になりますが、厳密にいうと、幕府による貿易独占です。つまり、諸大名たちが海外貿易のうまみから、規制されていくことによって、幕府だけにその権限や権力が



集中していくということです。これは、家康自身が経済をそういうかたちで治めたからです。このことは徳川幕藩体制が260年ほど結構な長期安定政権をつくれた理由です》

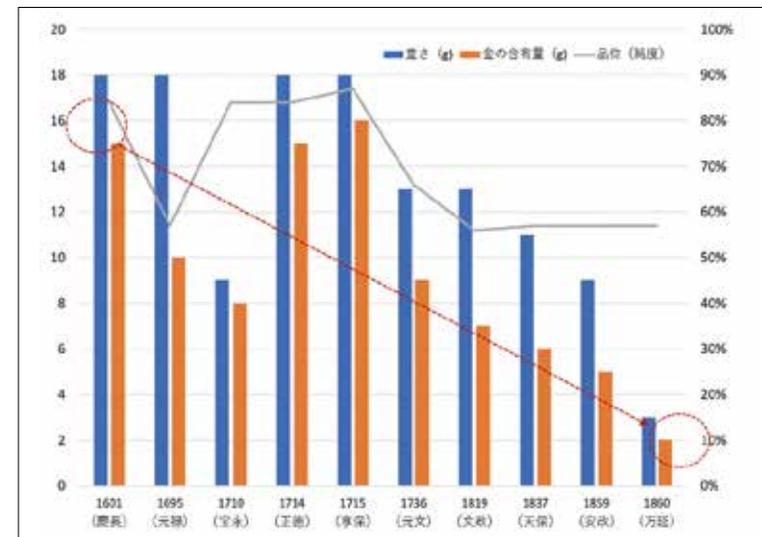
かくして家康は、世界的にも稀な平和国家をつくりあげ、経済的な発展の基も築きあげました。それゆえにこそ、江戸幕府は長期にわたり政権を維持できたのです。また、このことが家康の評価を著しく高めているといえます。

江戸の金融政策～貨幣改鑄について

ここに示すグラフは、養田功一郎先生がテンミニッツTVの講義でお示くださったものです。江戸時代の貨幣（小判）の金の含有率と重さ、さらに品位を示しています。

家康の時代には大久保長安を登用して、西洋の精錬方法なども導入し、金の産出量を増やしました。しかし、その後、国内の金の産出量が減少していきます。

江戸期における貨幣の改鑄と品質の変化



出典：日本銀行金融研究所資料等に基づき作成

一方で、幕藩体制の確立によって世が治まり、経済が発展していきます。そうすると、経済規模はどんどん発展しているのに、金の産出量が減ることで、それに見合う貨幣がつかず、貨幣供給量が追いつかないことになってしまいます。現代的に言えば、デフレ不況の危機に直面することになったのです。

そのときに登場したのが、第5代将軍・徳川綱吉と6代将軍・家宣いえのぶに勘定奉行として仕えた萩原重秀おきわらしげひでです。萩原重秀は1674年（延宝2年）に幕府の勘定方となり、1696年（元禄9年）には勘定奉行に就任しますが、1695年（元禄8年）に貨幣改鑄かいちゆうを断行していました。金の含有量を減らした元禄小判ちゆうぞうを鑄造したのです。

これにより幕府は通貨発行益を手に入れますが、一方でこれは市中の貨幣供給量を増やすことも意味しました。このことによりデフレ危機に陥らず、元禄の繁栄を下支えすることになったのです。

萩原重秀は、貨幣の価値を支えるのは幕府（=政府）の権威と信

用だと考えていました。金の価値によって貨幣の価値を担保する「金本位制」的なあり方ではなく、現在の紙幣（=信用通貨）にも通じる発想を持っていたといわれます。

しかし、当時は経済理論が整備されているわけではありません。しかも、武士の社会では、何よりも権威や格式が重んじられます。

萩原重秀の経済政策に、猛烈に反対したのが新井白石でした。新井白石は博学で立派な人物でしたが、経済がわかっていたわけではありません。新井白石から見れば、萩原重秀による貨幣改鑄は「幕府の権威と格式を傷つけるもの」以外の何物でもありませんでした。朝鮮が日本の貨幣を受け取らなくなったり、小判の質についての悪評が立ったりしたことを大いに問題視し、萩原重秀を強烈に弾劾し、失脚させます（正徳2年=1712年に勘定奉行を罷免）。

養田功一郎先生のグラフでも、その後、急激に含有量や重量を幕府初期に戻したことが一目瞭然

小判名	改鑄年	重さ (g)	金の含有量 (g)	品位 (割合)
慶長	1601	18	15	84%
元禄	1695	18	10	57%
宝永	1710	9	8	84%
正徳	1714	18	15	84%
享保	1715	18	16	87%
元文	1736	13	9	66%
文政	1819	13	7	56%
天保	1837	11	6	57%
安政	1859	9	5	57%
万延	1860	3	2	57%

出典：日本銀行金融研究所資料等を基に作成

です（正徳小判）。

いつの世にも、権威や格式を何よりも重んじる人はいるものです。しかも、そういう人は「立派な人」であることが多いものです。立派な人であるだけに、説得力も

ある。しかしこの新井白石の政策によって、デフレ不況に入っていくことになります。

8代将軍・徳川吉宗は、儉約や年貢の強化（増税）、新田開発や商品作物の育成などによる打開をめざします。世にいう「享保の改革」です。とりわけ新田開発や商品作物の振興が、その後の発展の基になったことはありましようが、しかし、それだけで経済を立て直すことができなかつたことは、養田先生のグラフからも見て取れます。

正徳小判の改鑄が1714年（正徳4年）、享保の改革がはじまったのが1716年（享保元年）ですが、1736年（元文元年）には貨幣の改鑄が行なわれることになります（元文小判）。これによってデフレ不況は克服され、その後の経済成長につながり、やがて文化文政期（1804年～1830年）の「化政文化」の発展をもたらします。そのことは、この元文小判がその後、80年にわたって用いられていることからわかります。

実は、元文小判の改鑄を提案して進めたのは、名奉行として名高い大岡忠相^{ただすけ}でした。徳川吉宗の治世下で町奉行を務めた大岡忠相は、もちろん享保の改革の「産業政策・社会政策」的な部分も推進していましたが、結果としてこの貨幣改鑄とのベストミックスによって経済は活気を取り戻すことになります。

大岡忠相といえば、「大岡越前」としてドラマになるほど、江戸時代から人気が高い人物ですが、庶民は実によく「経済の機微」を見抜いているものです。

江戸の最盛期はいつか

江戸時代の最盛期とは、どの時期を指すのでしょうか。いろいろな見方がありますが、幕末の人々は、第11代将軍・徳川家斉の

治世が最盛期だと考えていたようです。

徳川家斉は、現在の日本では、そこまで知名度のある将軍ではないかもしれませんが。しかし、幕末に活躍し、名君としても知られる松平春嶽（越前福井藩主）が、家斉を高く評価していたことを山内昌之先生がご指摘くださいます。

《春嶽が書いている（今風にいうと）「エッセイ」を見ると、やはり「家斉は偉大だった」とあるのです。「大変な功をした将軍だった。ともかく53年間、この治世を持たせて半世紀以上ということで、そこで格別の破綻は生じなかった」と》

（山内昌之 徳川将軍と江戸幕府～徳川家斉（3）江戸の文化が爛熟した“理想的な時代”）

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=5019]

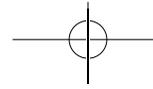


幕末期の人たちから「あの時代は良かった」と思い出される時代が、家斉の治世だったのです。

たしかに家斉の治世（1787年～1837年）は、化政文化（文化文政時代：1804年～1830年）も栄え、江戸時代のなかでもっとも平和で安



歌川広重「東海道五十三次」より「日本橋」(1834年)/Wikimedia Commons



十返舎一九「東海道中膝栗毛」を描いた錦絵 (19世紀前半)/Wikimedia Commons

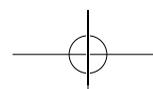


東洲斎写楽画「三代目大谷鬼次の奴江戸兵衛」(1794年)/Wikimedia Commons



葛飾北斎画 富嶽三十六景「神奈川沖浪裏」(1831年)/Wikimedia Commons

定していた時代だといわれています。浮世絵や歌舞伎、川柳、滑稽本など、現代に知られる江戸期の町人文化の全盛期にあたります。また、『古事記伝』を著した本居宣長が登場したように、国学も発



達しました。さらには、蘭学が大成した時代でもあります。

江戸の最盛期前夜～田沼意次の時代

まずは、家斉の治世の前に江戸時代はどのような状況だったかについて、少しふれてみたいと思います。前述のとおり、大岡忠相が進言した「元文の改鑄」もあって、江戸は経済的にも大きく発展していました。そうしたなか、都市の繁栄や生産、税収をどのようにしていくかが問題になっていました。この時代について、山内昌之先生は、以下のように指摘しています。

《江戸が大きくなっていったときに、江戸という都市というものの繁栄や生産、あるいは税収をどのようにしていくか。つまり、商人に対して「重農政策」ではなく「重商政策」をとり、都市の商人や消費者をいかに新しい生産と消費のシステムに入れていくか。そして、そこから幕府が税を吸収していくか。このような時代に入ってきたことを、幕府の新しいビジョンとして考えなければいけない時代に来ました》

(山内昌之 徳川将軍と江戸幕府～家重、家治、家斉編

(4) 田沼意次の重商政策と不運)

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4335]



そこで出てきたのが、田沼意次です。山内昌之先生は、田沼について以下のとおり指摘しています。

《重商政策の非常に大きな観点は、やはり国を開くということです。折からロシアの進出が目立ち、ロシア問題をどう処理するかということが、田沼の頃から江戸幕府の大きな政治課題になってきま

した。簡単にいうと、田沼は国を開く開国政策をとろうとしました。非常に斬新で革新的な重商政策と開国政策へ舵を切るといった時代の要請に出現したのが田沼だったのでしょ》

しかし、田沼意次の時代は、浅間山の大噴火をはじめ天災や災害が続き、その結果、天明の大飢饉も起こりました。

山内先生は、天災によって印旛沼開拓が失敗した不運をご指摘くださいます。

《印旛沼の開拓は大変大きな事業で、印旛沼開拓のために少なくとも15万石以上の増収を図ろうとしました。印旛沼の開拓は非常に魅力的なのです。そして事業が進み、いよいよ完全な成立の直前までいったときに、洪水が起きて利根川が氾濫します(天明の洪水)。従来の水深量ならば問題なく太平洋に水が流れていったところ、当時「浅間焼け」といわれたように浅間山噴火により火山灰が利根川にも降り積もり、河床を高くしていたのです。利根川が氾濫した結果、印旛沼でせっかくなつくっていた堤、そして利根川から内海(東京湾)に水が流れ込んでいくかたちでつくっていた排水システムが一気に崩壊したのです。

干拓して、いよいよ本格化という間近まで来ていたのが、自然災害で一拳に無残にも破壊された。その結果、田沼はあたかも「印旛沼という無謀な干拓事業に手を出した人間だ、山師だ」といわれます》

さらに田沼の重商主義的な政策は、荻原重秀の経済政策に新井白石が猛反発したのと同様に、守旧的な武士層からは大きな反発を招きます。

かくして若年寄を務めていた田沼意次の息子(意知)は暗殺され、

田沼意次も失脚し、悲惨な晩年を迎えることとなります（天明8年=1788年、没）。

その後、第11代将軍・徳川家斉の治世最初期の1787年（天明7年）に老中首座・将軍補佐となった松平定信によって「寛政の改革」が行なわれます。倹約や統制、さまざまな産業政策が展開されますが、よく知られた狂歌「白河の清きに魚のすみかねて もとの濁りの田沼恋しき」（※松平定信は奥州白河藩主だった）に象徴されるような批判が高まり、1793年（寛政5年）に松平定信は失脚することになります。

田沼時代の「腐敗」をどう考えるべきか？

ちなみに、田沼時代（1767年～1786年）の政治といえば、「賄賂」や「腐敗」が指摘されます。近年では、「田沼政治はいわれるほど腐敗していなかった」「田沼意次自身は、実は清廉だった」などといった指摘もなされますが、火のないところに煙は立たないともいいます。そもそも、江戸時代は「付け届け」が当たり前の時代ですから、なにがしかの背景があることは間違いありません。

しかし、腐敗だから単純に「悪」なのか。そこを鋭くついたのが渡部昇一先生でした。渡部先生は、1975年に発刊された『腐敗の時代』で次のように指摘しています。

《浮世絵の黄金時代は徳川時代のいつ頃かと思い、自分の宿に帰って調べてみた。そして春信、春草、歌麿などは、すべて田沼時代という、極めて評判の悪い時代に活躍していることを発見した。（中略）ふと気がつくと、国学は幕府体制にはあまり都合のよくない学問である。では、それがいつ栄えたかをチェックしてみると、浮世絵の栄えた時期と同じなのだ。つまり政治的腐敗の故に、田沼

ならぬ泥沼とも呼ばれるあの時なのである。

これはどうしたことか、と思って少しくわしく見ると、驚いたことには蘭学の金字塔ともいべき杉田玄白らの『解体新書』や大槻玄沢の『蘭学階梯』が出たのも田沼時代、平賀源内がエレキテルの実験などをして人を煙に捲いていたのも田沼時代、恋河春町の『金々先生栄華夢』など、いわゆる黄表紙が出はじめたのも田沼時代、川柳こと柄井八右衛門が活躍したのも田沼時代、蜀山人をはじめとして狂歌の隆盛だったのも田沼時代、もっとまじめな所では、塙保己一の『群書類従』が出、心学がひろがり、蕪村が活躍したのも田沼時代である》（渡部昇一『腐敗の時代』文藝春秋、PHP文庫）

こう指摘した後、渡部先生はその次の松平定信の時代と比較していきます。

《定信の倹約奨励となるとなさらおかし。彼が贅沢として非難したことの中には、いろいろ新しい工夫をした品物を作ることがある。創意工夫はいけないというのだ。書物や絵草紙や浮世絵もいけない。高級なお菓子もいけない。女の装身具などに金など使ってはいけない。庶民の女が髪結を頼んではいけない。髪結を仕事とするものは、着物を繕うとか、もっと役に立つ仕事につかなければならない……というふうには際限もなく禁令が続く》（同書）

そして、さらに寛政異学の禁が行なわれ、学問や文芸が統制・弾圧されたことを強調し、次のようにおっしゃいます。

《贅沢品を攻撃したり、政治の腐敗を声高に叫ぶ勢力には気を付けろ、と私の個人的体験と、ささやかな歴史的知識はいつも耳もとでささやく。ウォルポール内閣を腐敗していると言って倒したの

は、平和に飽きて戦争しなくなった連中だった。田沼を腐敗していると弾劾した政権は異学の禁をやった。財閥と結びついている政党政治は腐敗しているといつて首相や大臣を暗殺した軍人たちは、国家総動員体制を作り、言論出版等臨時取締令を公布し、「贅沢はやめましょう」といって無茶な戦争に突進していった。もう1つ例を挙げておけば、ヒトラーがワイマール時代に終止符をうつ時も、それを腐敗の時代と規定したはずである》(同書)

渡部先生は発想を昭和に飛ばし、軍人たちが政党政治は腐敗していると攻撃したことにふれつつ、「組織的腐敗」と「個人的腐敗」に言及していきます。

陸軍は、政治家の「個人的腐敗」を攻撃したが、その陸軍には「機密費」という税金から出た龐大なる財源があって、その用途などは一切不明だった。また、昭和17年の翼賛選挙では、今の金で2000万円から3000万円を臨時軍事費からもらって当選した推薦代議士が「陸軍代議士」と呼ばれた。

個人的腐敗は甚だしく「嫉妬」を起こさせやすく、腐敗として糾弾される。だが、組織的腐敗は人の嫉妬心を刺激しないという不思議な性質を持っていて、「正義、清潔」とされることもある……。

バブル期以降から現在に至る日本の姿を見ている、まことに多くのことを考えさせるご指摘といえましょう。

江戸時代の最盛期～徳川家斉の治世

さて、松平定信が失脚した後も、第11代将軍・徳川家斉の治世はまだまだ続きます。なにしろ家斉は、将軍の在位期間が50年間もある人物です。山内昌之先生は、これほど長い期間、権力のトップに就くことは世界的にも稀だと指摘しています。まずは、家斉とい

う人物について、山内昌之先生のご解説を見ていきましょう。

《人間が今でも50年間（大御所時代を併せて53年間）も現役で、しかも権力のトップにいるのは世界史で見ても稀有なことです。家斉以外、あまり思い当たらない。

彼は15歳くらいで将軍になり、69歳まで生きている。そのあいだ、事実上、権力のトップにあり続けた。ですから、彼がやはり健康であったということが1つあります。

それから、どんなに健康であっても根本的なところで、権力のトップとはいえ勤が狂ったり、判断力が鈍ったり、物事の軽重を忘れていたり、いろいろなことで失敗する人間が多いものです。

家斉は、その時々に見合った老中たち、宰相たちを起用して、その時代と自分の今いるポジションを的確に理解し、宰相に任せるといった構造をとっていきました。しかし、肝心の政策決定は自分が握っていた。考えて見ると、最初に選んだのは松平定信（寛政の改革）、それから最後は水野忠成^{ただあきら}で、2人は全然性格が違います。この水野は、田沼と並ぶほど腐敗や汚職の徒といわれているのだけれど、そういった人物に至るまで適格に、時代の要請、あるいは自分の問題関心に合わせるかたちで変わることができた。そのような判断力がありました。

それから、これは極端に語られるけれど、家斉ほど政治（公的生活）と大奥（私的生活）を巧みに利用して政治を行ない、かつ人生もエンジョイした人間は稀有だということです。それはまったくの純粋な享楽や快樂だけのためだったかということ、必ずしもそうでないところが、家斉の器量、力量というものです。徳川の将軍家は、秀忠（2代将軍）の血が家継（7代将軍）で絶えたように、いつ自分の血が絶えるかわからないという不安感を持っていたのです。従って家斉は、血を絶えず増やしていく。できるだけ自分の血統で天下

に血を分けていくという発想があったわけです》

(山内昌之 徳川将軍と江戸幕府～徳川家斉(1) 家斉
が長期政権を維持できた理由)

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=5017]



徳川家斉の治世で、松平定信の後に幕政を主導したのは、共に寛政の改革を推進した(松平定信派)の松平信明らでした。彼らは寛政の改革の路線を継承しますが、やがて将軍・徳川家斉と軋轢が高まるようになります。1817年(文化14年)に松平信明が危篤に陥ると、家斉は「田沼意次派」であった水野忠成を老中にします。

水野忠成は、1819年(文政2年)に改鑄を行ないます(文政小判)。これによって、経済は上向きますが、さらに子沢山だった徳川家斉の子女の婚儀出費などもかさみ、財政も放漫なあり方になっていくのです。

開国の「経済的インパクト」～国富の海外流出

徳川幕府が行なった貨幣改鑄は、幕府(政府)の絶大な権威と信用に立脚したものでしたので、さまざまなハレーションを起こしながらも、貨幣としての信用そのものは維持されました。しかし、それが大きく転換する局面が訪れます。

それが、欧米列強の圧力を受けての「開国」でした。これがもたらした経済的なインパクトが、その後の幕府の力の低下に大きな影響を与えることになりました。

養田功一郎先生は、開国当時、日本と海外とで、金銀の交換比率、交換の仕組みが異なっていたことが幕末の猛烈なインフレにつながり、大きな混乱を引き起こすことになったと指摘しています。

《話は天保時代にさかのぼります。それまで幕府は金を本位通貨としつつ、銀は重さに応じて金と交換する制度としていました。金は両や分などの額面表示があり4分が1両に該当していました。銀貨は主に額面表示はなく、重さで測る「丁銀」と呼ばれる秤量貨幣でした。

しかし、天保の大飢饉発生に伴う財政難から、額面を表示する「天保一分銀」という計数貨幣を発行しました。1分銀4枚で、1両小判と交換する仕組みとしたのです。これは重さをベースにすると、丁銀に含まれる銀の量約56グラムに対し34グラムという、60パーセント程度の重さの1分銀4枚で金貨と交換できるものでした。

一方、ドルの銀貨は、重さをベースにした貨幣であり、海外においてはドル銀貨4枚(4ドル)が、日本の小判1枚(1両)相当と交換できる価値をもっていました。

こうした中、開国時にドル銀貨を国内で使える1分銀と交換する比率が問題となりました。米国総領事のハリスは、ドル銀貨1枚と1分銀3枚を交換することを主張しました。最終的に、幕府は要求をのまざるを得ず承諾しましたが、いったい何が起こったのでしょうか。



まずは、日本国内で量を基準にドル銀貨1枚(1ドル)を1分銀3枚(3分)と交換します。幕府の定める名目基準で、銀4分は金1両なので銀3分だと金0.75両分に相当しますが、この交換比率で金の小判に交換します。小判0.75両分は、海外に行くと地金(じがね)

にするとドル銀貨3枚（3ドル）になったので、この両替を繰り返すと1ドルが3ドルになるという驚くべきことが起きます。ハリスはこれを繰り返してかなり私財を増やしたと日記に書いています。



（幕府は）苦肉の策として、銀の量を増やすのではなく金の含有量を減らした金貨を製造しました。実に、3分の1程度の金の量しかない万延小判を新たに作ったのです。さらに、それまでは改鋳を行っても新旧1両小判は1枚ずつの交換でした。ただし今回は、さすがに新小判の金の量も少ないため、旧小判1枚（1両）に対し、新小判3枚（3両）程度、すなわち金の実量の量が同じくらいになるような交換をすることにしました。

よって、幕府は改鋳で差分の金を手にすることができないので、改鋳益は発生しなかったようです。一方、街には新小判に両替する人々があふれかえります。3倍の額面金額を得た人は一時的に購買力が上がります。一方、新小判1両は金の量でみれば、前の1両の3分の1しか価値がないことを物売るサイドの商人は分かっていますから、売り物の値段は自然に上がることになります。こうしてすさまじいインフレが発生したのです》

（養田功一郎 歴史的転換点における影の主演「インフレ」(1) 現代と幕末の共通点)

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=5241]



このような歴史上のできごとを単なる過去の話として割り切るのではなく、今の時代と照らしあわせて考えることが非常に重要です。養田先生は、以下のように、現在に当てはめて考えると指摘し

ています。

《この話は、日本と海外で金と銀の交換比率が違ったため、金が流出して国富が失われたというような解釈になっていることが多いと思います。重さ基準でも交換比率は違ったので、そういう側面もありますが、話の本質としては、幕府の威信があるときに銀貨の価値を重さ以上に評価して財源を確保していたところ、海外との比較により実質的な評価の見直しが行われ、実は価値がなかったことが露呈したというのが実態ではないかと思います。

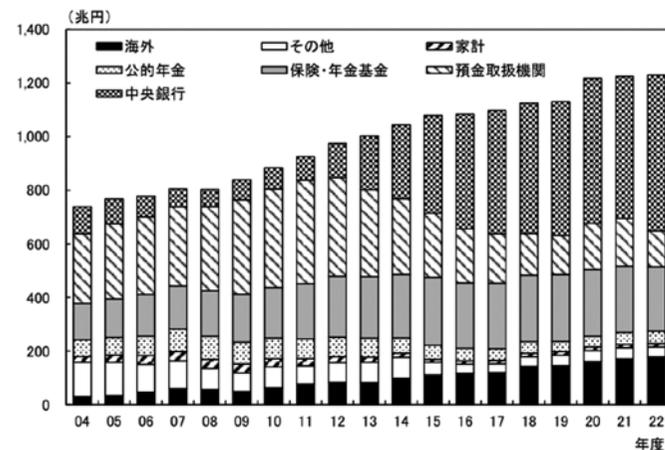
これを今風にいいかえれば、何が起こったといえるのでしょうか。例えば、震災やパンデミックが発生し、財源確保のために国債を大量に発行し中央銀行が買い取ったとします。そうすると政府は誰か別の豪商のようなお金持ちから借金しなくても、税金以外で大きな財源を得ることができます。お札を沢山刷って財源を確保するという言い方でも良いでしょう。政府に返済能力があり、威信が保たれていれば、額面が同じお金はこれまでと同じ価値を持つでしょう。

しかし、あるとき、海外から「政府は本当に返済能力があるのか」「このお金、あるいは国債は本当に前と同じ価値があるのか」と疑問を投げかけられ、外国為替での交換時に割り増しを要求されると、どうなるでしょうか。その通貨の価値は下落し通貨安になり、インフレが発生します》

こうしてみると、幕末のインフレは、ただの昔話ではないことがわかるのではないのでしょうか。日本の将来像を考えるためにも、同じ過ちを犯さないためにも、過去のインフレがどのようにして起きて、どのような問題を引き起こしたのかを考察することは非常に意義があることだといえます。

【参考】

国債等の保有者内訳



2023年12月20日 日本銀行調査統計局
 参考図表 2023年第3四半期の資金循環(速報)より引用
<https://www.boj.or.jp/statistics/sj/sjexp.pdf>

ちなみに、上のグラフは、現在の日本における国債等の保有者の内訳を示しています。アベノミクス以降、中央銀行（日本銀行）の割合が増えていることがわかります。

徳川幕府の「貨幣改鑄」をどう考えるか～ 金本位制の問題点

幕末のインフレのからくりを見てきましたが、それでは、徳川幕府の貨幣改鑄策は、基本のところ間違いだらけの政策だったのでしょうか？

簡単にそうはいえません。実は欧米諸国自身が、金本位制を採用することによって「デフレ不況」を引き起こしているからです。

金本位制とは、貨幣の価値を金と結びつけることによって担保するあり方です。金本位制の下では、各国の中央銀行は発行した紙幣と同額の金を保有していて、いつでも相互に交換することを保証し

ていました。ですから貨幣の量は、金の量に従って決まることになります。経済がどんどん発展しても、保有する金の価値以上の紙幣は発行できない。そのためデフレ不況に陥ってしまったのです。

柿埜真吾先生は、その事情を次のように解説くださいます。

《1870年代から（アメリカ、ドイツ、フランスなど）いろいろな国が金本位制を採用しようとしはじめます。そうして、金本位制を採用しようとするいろいろな国が行動しはじめると、世界の金の量はそれほど多くはないですから、金が不足してきます。「金が不足する」とは、金本位制の場合は「貨幣の不足」です。

そうすると世界中が、当時でいう「Great Depression」となりました。この言葉はその後、1929年からの「大恐慌」の名前になったので、今はそのような言い方はしません。しかし、当時の感覚では「大恐慌」です。経済が停滞した状態が続いて、「何かこれはダメなのではないか」という感じになってくるわけですね》

（柿埜真吾 本当によくわかる経済学史(4) 古典派経済学の特徴と時代的背景）

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4696]



ある意味では、19世紀以降の世界全体が、17世紀以降に徳川幕府が直面したのと似た課題に直面したともいえるかもしれません。

そう考えていくと、欧米の「金本位制」の考え方と、徳川幕府の「貨幣改鑄」の考え方のどちらが妥当だったのかは、まことに興味深い問題となります。

しかし、幕末当時は当然ながら、その両者を経済学的に比較検証するベースはありませんでした。西洋諸国のほうが、日本よりも技術や軍事力が進んでいたため、日本は西洋の論理を呑まざるをえなかったというところでしょう。

幕末の激しいインフレの実態とその影響

しかしその結果、日本はまことに厳しい状況に直面することとなります。

幕末にどの程度のインフレが起きたかについて、養田功一郎先生がテンミニッツTVの講義のために作成くださったグラフを見ると、銀基準で8倍ほど、金基準でも4倍ほどの物価高になっていることがわかります。そして米価は10倍をはるかに超えて暴騰しています。

このインフレによって、実際に当時の人たちにどのような影響が出たのでしょうか。養田先生は、以下のように指摘しています。

《武器の売買や金銀の両替を担う豪商、生糸の生産者、仲買人などはかなり儲かったと思います。渋沢栄一の生家は養蚕農家でした



養田功一郎 テンミニッツTV講義「歴史的転換点における影の主役「インフレ」(2)幕末のインフレと1900年代前半」より引用

ので大層儲かったことでしょう。

一方、収入が決まっている武士や劇的に生産量を増やせない農民、街に住む一般的な職人、商人などは収入が上がらず、食べるのにも困ったことになったと思います。幕末には「ええじゃないか」という民衆の踊りが流行したといわれていますが、これなども困窮して明日も分からない民衆の怒りや嘆き、そして開き直りが背景にあると思います。

なんとといっても、武士や農民は江戸幕府の重要な支持基盤です。その重要な支持基盤の人々が困窮したのは幕府にとって痛手だったでしょう》

(養田功一郎 歴史的転換点における影の主役「インフレ」(2) 幕末のインフレと1900年代前半)

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=5242]



もちろん、幕末の激しいインフレには、その他の要因もあります。外圧からの国防意識の高まりにより、物資の供給が軍用品に偏ったことや、開国により海外勢が日本の物資を高値で購入したこと、震災、疫病の発生で生産力やサービスの提供が落ち込んだことなどが挙げられます。それらの要因が重なりあうことで、幕末に凄まじいインフレが発生したのです。

幕府瓦解のその他の要因

このような凄まじいインフレは、間違いなく、幕末に幕府の力が衰えた大きな一要因となりました。

もちろん、幕府の力の低下の理由は、ほかにもあります。たとえば、黒船が来航する前の1830年代からは、ロシア軍の軍艦が択捉島(えとろふ)にやっています。当時は、いつ列強諸国の圧力がかかってもお

かしくない時代だったのです。

また、前述のとおり、徳川家齊の治世の後半には、天保の飢饉

(1832年～1839年)、大塩平八郎の乱(1837年)などもありました。家齊の治世で、世の中は安定しているように見えてましたが、幕末の転換期へ向けて、着実に時代は動きはじめていたのです。

平和ボケしてしまっただけでは、転換期では立ちゆきません。たとえば当時の清朝は、1840年のアヘン戦争により壊滅的な被害を受け、崩壊寸前の状態になりました。実は、清朝は、イギリスなどの外圧を受ける前の第4代皇帝の康熙帝から、第6代皇帝の乾隆帝の時代までは、比較的平和で安定していて、経済的にも文化的にも発達し、世界でもっとも栄えた国だったといわれています。

しかし、乾隆帝の治世の後半からは、経済停滞、自然災害、人口問題、食糧不足などの問題が徐々に露呈し、清国は衰えていきました。そうしたなかで、乾隆帝が死去してから40年後に、アヘン戦争が勃発するのです。

安定していた時代においても、治に居て乱を忘れず。平和ボケせずに、乱世に向けてしっかりと準備していくことが非常に重要だといえるでしょう。

薩摩藩はなぜ幕末に「強大な力」を持てたのか～その経済的背景

幕府瓦解にインフレという経済的な要因があったことを見てきました。しかし、その一方で、薩長はじめ雄藩が着々と経済力をつけていたことも重要です。

清朝の全盛期

第4代皇帝 康熙帝 (1661年～1722年)

第5代皇帝 雍正帝 (1722年～1735年)

第6代皇帝 乾隆帝 (1735年～1796年)

今まで見てきたように、江戸期を通じて社会全体の経済規模が大きくなり、貨幣経済、商品経済が興隆していったのに対して、幕府や各藩は、依然として米中心の経済でした。そのためもあり、どんどん窮乏していきます。

そこで、各藩は藩政改革を断行し、特色があって高値で販売できる特産品の奨励や、流通・貿易の促進など、さまざまな産業政策を行なうようになっていきます。藩政改革に成功した藩が、幕末に活躍する雄藩になります。

薩摩藩や長州藩も、はじめから幕府を脅かすような強大な勢力だったわけではありませんでした。なぜ薩長は、幕末に強大な力を持ち、明治維新の中心になることができたのでしょうか。

もともと薩摩藩は、江戸時代を通して、借金だらけの藩でした。しかし、島田晴雄先生は、財政改革により苦境を乗り越え、力をつけたと説明しています。以下、島田先生のご解説です。

《薩摩の借金は雪だるま式に増え、1827年には500万両にまでなりました。金利が高く、利子だけで60万両であるのに対し、藩の収入は12万両でした。借金の金利で藩の収入の5倍です。

この状況を改革したのが、下級武士出身の調所広郷という人物でした。茶坊主として8代藩主の島津重豪に認められ、1838年には家老に抜擢されました。彼はこの大借金をほとんど清算したのです。

どうやって清算したのでしょうか。まず調所は、藩に金を貸している商人たちに借金500万両を250年の無利子分割払いにするよう掛け合いました。これは実質的に借金をチャラにせよという要求と等しいため、商人は驚きました。しかし、商人たちもまたなかなかの薩摩人で、この要求を了承するのです。密貿易ばかりしているため、商人たちは協力する代わりに、密貿易をさせろと交渉したわ

けです。踏み倒された商人たちにもそれなりのメリットを与えたといえることができます。

調所は他方で、砂糖の専売と密貿易によって、財政健全化に尽力しました。砂糖の専売は大きな利益でした。その収益は大島、徳之島、鬼界ヶ島といった離島と、琉球からの収奪で得られたものです。砂糖は貴重品なので、内地では高い値段がついているのですが、非常に安い値段で買いつけていました。しかし、島民には私的売買を禁止し、違反者は死刑に処しました。こうしてすべてを買い上げ、高く売ることを制度化しました。これに密貿易などによる利益を合わせ、財政再建を果たすとともに、250万両もの資金を蓄財しました。この成果によって、幕末には巨額の軍艦や武器を購入することができたのです》

(島田晴雄 明治維新とは～幕末を見る新たな史観(8)
幕府と薩摩藩の実情)

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=2362]



このように薩摩藩は大島などの離島から搾取するという強硬的な手段を含め、徐々に富を蓄えていきました。

また、浜崎太平次(8代目)という人物が中心となって、アメリカの南北戦争(1861年～1865年)によって大儲けして、薩摩藩の軍事力向上に影響したという興味深い話があります。このことについても、島田晴雄先生のご解説を見ていきましょう。

《浜崎太平次(8代目)は、上海などアジア諸国で支店網を張り、現代の商社並みにビジネス情報を収集していました。そのなか、上海市場で綿花の価格が3～4部に暴騰しているという情報を入手しました。この暴騰は、アメリカの南北戦争が原因です。

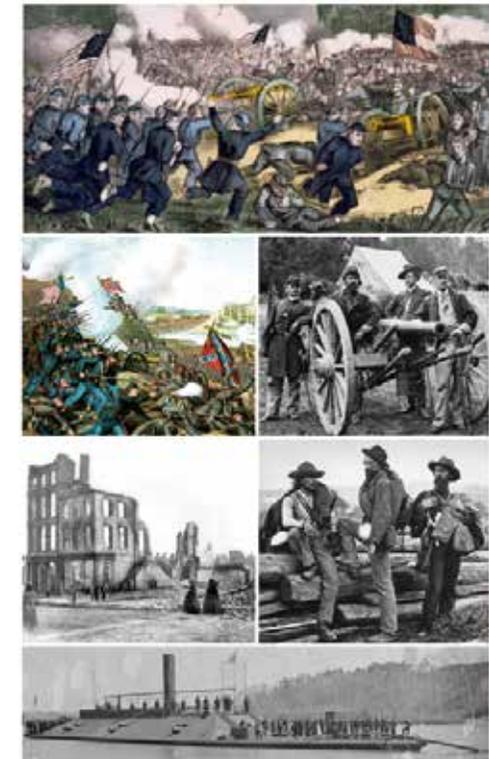
南北戦争は、1861年から65年にかけて奴隷制度を固持する南

部と制度撤廃を訴える北部のあいだで争われましたが、最終的には北軍が勝利しました。この戦いで北部が勝利した結果、綿花畑が広がるアトランタは陥落しました。

イギリスの綿工業はアメリカのプランテーションで成り立っており、それがアトランタだけでなく南部全体の綿花畑の荒廃により成り立たなくなり、世界中が綿花不足になりました。その結果、綿花の価格は高騰したのです。

薩摩藩はこの戦争を利用して、日本全国を駆け回り、日本のあらゆる綿を最低価格で買いつけ、それを上海でトーマス・グラバーに頼み6～7倍で売却し、莫大な利益を得ました。その額は、今のお金にして約6000億円だそうです。これをすべて幕府公認で調所広郷が管理していたので、薩摩藩の軍資金になったわけです》

薩摩藩の強大化の裏に、アメリカの南北戦争があったというのは意外かもしれません。環境変化が激しい乱世においては、外部の情報をいち早く察知し、的確かつ大胆に行動することが重要だと教えてくれます。



南北戦争(1861-1865)

長州藩は関ヶ原の合戦後の大減封から いかに復活したか

また、長州藩も薩摩藩と同様にはじめから強力な力を持っていたわけではありませんでした。藩の財政改革などの血のにじむような地道な努力によって力を蓄えていったと島田晴雄先生は指摘しています。

《長州藩は関ヶ原の戦いで西軍側についたため、戦いに負けた結果、112万石の領土がわずか30万石まで削減されてしまいました。長州藩はこの苦境を克服するため、江戸時代初めから新田開発を行ない、その増収分を藩財政に組み入れました。長州藩の農民たちは努力して「隠し田」をつくりましたが、長州藩ではお目こぼしは一切なく、すべて藩の石高にされました。こうした増収により、とうとう幕末には関ヶ原の戦い直後の3倍まで増石しました。そこには血のにじむような努力があったのです。

しかし先ほど述べたとおり、徐々に米中心の経済ではなくなっていきます。長州藩では新田開発だけでは財政は賄えなくなり、その結果、江戸時代後半には長州藩もかなりの借金を抱えました。この借金を立て直したのが、家老の村田清風でした。

村田はまず、藩士たちの借金を肩代わりし、藩はその借金を37カ年の年賦皆済仕法という方法で清算することとしました。これは、37年のあいだ、毎年借入金の3パーセントを払い続ければ元利完済とする方法です。これは37年払えば111パーセント支払ったことになり、37年で利子が11パーセント、年利にして0.3パーセントです。大幅な金利引き下げであるため、その代わりに藩士の俸禄を引き下げました。

それだけでなく、村田は下関に私的な税関ともいえる越荷方をつくりました。そこで商人の便宜を図りつつ、手数料を取ることで儲けを得ました。また、別会計の産業振興機関である撫育局^{ぶいく}というものをつくり、特産品の発展に注力しました。こうした取り組みの結果、幕末には相当なお金を持てるまでになりました》

(島田晴雄 明治維新とは～幕末を見る新たな史観(9)
長州藩の財政)

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=2363]



長州藩といえば、吉田松陰や松下村塾の教え子たちである久坂玄瑞、高杉晋作、吉田稔麿、入江九一らに代表されるように、幕末には、司馬遼太郎さんが「狂」という言葉で表現したほどの透徹した思想的な行動を示した藩です。その長州藩の動きが「空回り」に終わらなかったのは、まさに今見てきたような経済的な取り組みの賜物といえるでしょう。

さらに長州藩の場合、高杉晋作の活動を支えた白石正一郎のような商人の存在も忘れられません。白石正一郎は下関で荷受問屋を営んでいましたが、高杉晋作や久坂玄瑞ら長州の志士ばかりでなく、薩摩の西郷隆盛や土佐の坂本龍馬などといった志士たちも熱心に支援したことで知られます。

白石正一郎がこのような活動ができたのは、下関という場で商売を営んでいたからこそでしょうし、養田先生が指摘されていたような「豪商や生糸の生産者などはかなり儲かったと思います」という流れに乗れた部分もあったのだらうと思います。

しかしそれにしても、白石正一郎はあまりに志士たちを支援したために大きな借財を抱えて、身代を傾けてしまいます。にもかかわらず明治維新後には見返りを求めぬ生き方を貫きました。それほど商人としての気概があってこそ、幕末の長州藩がありえたこと

は、いくら強調してもしすぎることはありません。

外国人商人との連携～大きな器と広い視野

薩長の台頭の裏には経済力があつたことにふれましたが、そのためには外国人商人の経験や才覚、さらに彼らの情報網を活用することも行なわれました。

特に、長崎のグラバー邸で名高いトーマス・グラバーというイギリス人商人は、雄藩の経済発展や人脈連携に大きく関わっています。このグラバーについても、島田晴雄先生がテンミニッツTVでご解説くださっています。

《グラバーという人物について、簡単に紹介します。この人物は、スコットランドの片田舎で生まれました。18歳で上海に、21歳で長崎に来ました。

グラバーは、ジャーディン・マセソンという商社における長崎商会の事務員となり、その後、コミッション・エージェントとして独立し、グラバー商会を設立しました。彼は長州藩士の伊藤博文と同じ年で、2人は非常に仲が良かったといいます。クラス会、あるいは体育会でのつきあいのような関係だったようで、グラバーの伝記を読んでいると、片言の日本語で毎晩のように伊藤と酒を飲んだことが伺えます。年中酒を飲み、いつのまにか仲間になって、自分も志士になったような気分だったといいます。



トーマス・グラバー(1838-1911)/Wikimedia Commons

グラバー商会は次第に大きくなっていきました。1863年に長州藩の5名が英国に密航留学をします(長州ファイブ)。この面倒をすべて見たのが、グラバーでした。また、列強4国の艦隊が長州を攻撃に来た際に、長州ファイブの伊藤博文と井上聞多が藩に戦争を止めさせるべく帰国してきますが、グラバーはその案内もしました。グラバーは案内した後、伊藤も井上も首だけが届けられるのでは



長州ファイブ: 左上から右に、遠藤謹助(造幣の父)、野村弥吉(鉄道の父)、伊藤博文、左下から右に、井上馨、山尾庸三(工学の父) / Wikimedia Commons

しかし結局、下関戦争は開戦し、砲撃によって長州藩が有する砲台はすべて占拠・破壊されてしまいます。

薩摩藩についても、グラバーは面倒を見ている。イギリスと戦争したにもかかわらず、イギリスに19人も留学生を送ったのです。また、坂本龍馬についても、亀山社中(海援隊)をつくり大型密貿易を行なう際、グラバーは全面的な支援を行ないました。このように彼は不思議な男です》

(島田晴雄 明治維新とは～幕末を見る新たな史観(9) 長州藩の財政)

[https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=2363]



ジャーディン・マセソン商会といえば、アヘン戦争の原因となった中国におけるアヘン販売などを手がけた会社です。東インド会社に類する、イギリスの「国策」とつかず離れずの存在といってもいいでしょう。「尊皇攘夷の志士」であれば、真っ先に疑ってかかっ

ジャーディン・マセソン社

1832年	東インド会社の船医だったジャーディン（スコットランド出身の貿易商人）とマセソンにより、中国広州で設立。 →アヘンの密輸と茶のイギリスへの輸出へ
1834年	東インド会社の中国貿易独占権廃止により、 民間商社として活動の幅を広げる。
1840年	ロビー活動によりアヘン戦争が勃発させる
1841年	香港に本社を移転。
1859年	グラバーが長崎代理店として「グラバー商会」を設立。
1860年頃	日本に進出して、横浜支店を設立。

でも不思議ではない相手です。

近年の日本では、そのような側面を捉えて、一部の志士たちが、あたかもイギリスなどの手先であったかのように論じられることもあります。しかし、そうとばかり見るのは短慮でしょう。むしろ、当時の志士たちが、大きな器と広い視野を持ち、大きな目的のためならば、「自分の眼で見て信頼できる相手」と結び、その力を活用した事例だと考えるべきだと思われてなりません。

たとえ立場が異なる相手であっても、信頼できる相手かどうかをしっかりと見極め、信頼できる範囲で手を結び、目的を達成していく。これは経営者の立場からすれば、ごくごく当たり前のことです。もちろん、大局を失わない判断は不可欠ですが、しかし、つきあたり組んだりしてはいけないというものではありません。黒か白か、ゼロか100かなどということは、物語の世界ならいざしらず、現実社会では、そうそうあることではありません。

もちろん一方で、当時のアジア諸国では、大きな利益を供与される代わりに国を売るような事例も、枚挙にいとまがありません。権力者や商人が籠絡されて、あたかも虫食いのごとくに国が蚕食されることが世界各地で起きました。しかしその点でも、幕末から明治期の日本人たちは、まことに見事だったと思います。

ちなみにグラバーは、戊辰戦争が終わると自身が手がけていた武器の商売に行き詰まり、破産してしまいます。それでもグラバーは（日本人と結婚していたこともあったのでしょうか）日本に残り、1911年（明治44年）に日本で亡くなっています。また、幕末にグラバーと交流していた日本人たちも、グラバーとは交友関係を続け、彼の知恵を活用しつつ、もう一面でグラバーを支えてもいました。それだけの信頼関係を結んでいたということでもありましょう。

このあたりの姿も、まことに日本らしいといえるかもしれません。

結論

260年間続いた江戸幕府がつぶれることになる背景にある大きな経済の流れのごく一部を駆け足で見えました。

デフレ不況に直面し、知恵を絞って対応しようとした幕府官僚もいました。その政策に反対する人たちもいました。しかし、間違いなくいえることは、彼らが自分たちの眼で見て、自分たちの頭で考え、最善と思われる手を打っていったことです。そして、誤った方向に進んでいると見えてきた場合には果敢にそれを修正していく、識見や力量ある人材が、徳川期には数多く輩出したということです。

そのようにして創りあげてきた繁栄が、度重なる天災や、外国からの圧力・衝撃によって揺らいだことも事実です。しかしそのときには、もう一方で、むしろその状況を追い風として雄藩が飛躍して、明治維新になりました。そうした時代環境を最大限に活かして、富を築き、日本近代化への道を拓いた商人や、富農たちもいました。

日本開国の混乱に乗じて、儲けようとする外国ならびに外国商

人が日本に入ってきたことも事実です。実際に国富が流失してもいます。

しかし、そのような状況であってもなお、当時の日本人たちは、相手の人物を見極め、自分たちの目的を達するために手を結びつつ、けっして当時のアジア諸国で見られるような国の蚕食的な悲劇には至らせることはなかった。そのことも心に銘記すべきです。

日本は今、まさに転換期後期の混乱のなかに立ち至っているようにも見えます。このようなときには、これまでの常識が常識ではなくなり、かつてメリットだったものが大きなデメリットに急転換することも起きかねません。

しかし、それは世の常、人の常。そのような状況にあっても、けっして悲観に陥ることなく、的確に時流を読んで、的確に富を築いていくかが大切でしょう。それは国富でも、個々人の富でも同じです。

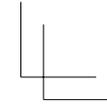
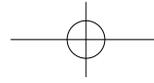
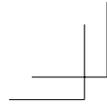
また混乱期には、売国的な富の築き方が大手を振るいがちなのも間違いありません。これからの日本がどうなるかも、予断を許しません。だからこそ、そのような弊害に陥ることなく、むしろ近代国家の建設に向けて雄々しく立ち上がった幕末明治人たちの気概を、われわれは忘れるべきではないでしょう。

佐久間象山や横井小楠など多くの逸材の師であったことでも名高い佐藤一斎は、「一燈を掲げて暗夜を行く。暗夜を憂うこと勿れ。只だ一燈を頼め」という言葉を遺しています。一燈とは、すなわち自分自身のことでしょう。自分の眼を信じ、自分の頭で考え、理想を失わず、国益・公益に貢献する道を進んでいく。

その気概は、江戸期から幕末維新时期まで、要路にあった日本人の多くに共通していたように思います。われわれも、ぜひともそのような歴史に学びたいものです。

徳川歴代将軍

代	氏名	在職	期間	享年
1	徳川家康	1603年 2月12日～ 1605年 4月16日	2年 2か月	75
2	徳川秀忠	1605年 4月16日～ 1623年 7月27日	18年 3か月	54
3	徳川家光	1623年 7月27日～ 1651年 4月20日	27年 9か月	48
4	徳川家綱	1651年 8月18日～ 1680年 5月8日	28年 9か月	40
5	徳川綱吉	1680年 8月23日～ 1709年 1月10日	28年 5か月	64
6	徳川家宣	1709年 5月1日～ 1712年 10月14日	3年 5か月	51
7	徳川家継	1713年 4月2日～ 1716年 4月30日	3年 1か月	8
8	徳川吉宗	1716年 8月13日～ 1745年 9月25日	29年 1か月	68
9	徳川家重	1745年 11月2日～ 1760年 5月13日	14年 6か月	51
10	徳川家治	1760年 5月13日～ 1786年 9月8日	26年 4か月	50
11	徳川家斉	1787年 4月15日～ 1837年 4月2日	50年	69
12	徳川家慶	1837年 4月2日～ 1853年 6月22日	16年 2か月	61
13	徳川家定	1853年 11月23日～ 1858年 7月6日	4年 8か月	35
14	徳川家茂	1858年 10月25日～ 1866年 7月20日	7年 9ヶ月	21
15	徳川慶喜	1867年 1月10日～ 1868年 1月3日	1年	77



【著者略歴】

神藏孝之 (かみくら・たかゆき)

1956年、東京生まれ。1980年、早稲田大学商学部卒業。1984年、松下政経塾卒塾（2期生）。松下幸之助塾長より直接指導を受ける。1986年、イマジニア株式会社設立、代表取締役社長就任。1996年、株式店頭公開。2006年、代表取締役会長兼CEO就任。2009年、東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム修了。2019年6月、取締役会長ファウンダーに就任。2022年、公益財団法人松下幸之助記念志財団理事、松下政経塾塾長代理。2023年11月、日本ビジネス協会（JBC）第6代理事長に就任。

